

てないから危険はないじゃん。お金は入るし、山手線で5分で3000円とか。お小遣い稼ぎ。痴漢の援助交際。汚れるって感覚はない。お金のためでもない。なんとなく。

杉2: 気持ち悪い。あとで絶対後悔するだろうな。お金欲しいくらいでそんな本当にやろうという気はしない。やっぱりおじさんで気持ち悪い。知らない人と、っていうのもやだけど、ましてや自分の父親と同年代の人なんて。将来まじめに生きてるときに人生の汚点みたい。それに警察の捜査かもしれないし。誰かに見られて脅されたり、あとからゆすられたらやばい。親にも申し訳ない、ただでさえ心配かけているのに。それに本当に好きな人ができたとき後悔するだろうな。バイトとかして苦労してお金貯めてなんか買おうっていう、普通の金銭感覚なくなっちゃうだろうし。

杉3: 考えた事ありますよ。実際やるってなると怖いってのもあるし、何されるかわかんないし。本当に言った通りに動くのかわかんないし。密室に入ったらどうなるか。やっぱり見知らぬ人となんかするって好きじゃないんですよ。お金が欲しいんだったらバイトするし。食事とかで2万とか稼げるなら、友達とかが好きな物買ってもらえるよ、やってみようかって言うんですけどね。

杉4: 小さいときからの常識的な部分、親からの。だって後々語れることでもないし、ましてや自慢できることではないし、人間的に恥ずかしいし。今普通に生きてて楽しいし、それをわざわざ汚すことはないかな、って思う。

杉6: しようと思ったことはないけど、興味本位でついていったことはある。何で声をかけるんだろう、ついていくと何があるんだろうって。だんだんわかってきたけど、お金が欲しいとかは思って無かったですね。たまにかっこいい人だったりするとそれもラッキーとか。相手は選んでました。自分が援交している人達と同じになんてなかつたし、怖いっていうのもあつたし。

■ いま、女子高生であることにどんないい点があるか

浜1: 学校の設備も整っているし、予備校のサテライト授業とかもあるし。

浜2: 流行とか、音楽でも服でもその中心になっているって感じ。一番遊べる範囲が広がるし、かといって自分で稼いでいる訳でもないから、結構派手に遊べるし、ラク。女子高生っていつの時代もおジサンにもてていたのだと思ってた。女子大生ブームのときは女子大生だったのかもしれないけど。

浜3: プリクラ並んでいるときとか、「早くしてよ」って言ったり、有楽(街)とか厚底靴で走りぬけたり、といった、恥ずかしいこともできる。これは女子高生の特権でもあるし、ギャルの特権でもある。

浜4: 父母や祖母に今の時代に生まれて良かったといわれる。物が増えている、着たいものを着れる。

浜6: 高校生のときは本当にバカなこととか迷惑なことも楽しい雰囲気に乗ってできたけど、今はそんなことバカだとか

恥ずかしいとか思う。高校時代は楽しい雰囲気壊すまでもない、と思ったけど今は誰かが注意しちゃう。(女子高生には)先生や親がいてあしろうしろって言うてくれて。女子高生ブームは続いていると思う。自分だって女子高生がいいと思うし、私たちが年取っていく中でも、高校生がいいなって思ってる時点で続いていると思う。

杉1: 何でもできる、一番いい。高2くらいが一番楽しかったかも。今は少し落ち着いた。昔と比較している訳じゃない。

杉2: 昔と比べたら欲しいモノが何でも手に入る。ゼイタク過ぎるくらい。スペインとかでも小さい子が物乞いしているのを見ると自分は恵まれているって。

杉3: 高2の夏とかすごく面白かった。青春で友達と遊ぶこと、一緒にオールとかしたり。友達の家で。みんなヨルだとなたら元気で。彼氏ができていんなとこ行ったりして、これも青春。

杉4: 大学生になって思うのは、女子高生に興味あるのってやっぱり女子高生なんです。自分たちが自分の世代に興味あるから、それに影響され易い。今だったら女子大生の何がって言うほうがやっぱり気になる。だから女子高生のときはテレビとかでもそういう子が出ていると気になったけど、今は他人事。別世界。こんな豊かな時代に生まれたってこと自体が良いと思うけど、いつの時代も女子高生、高校生は楽しいのでは？学生の時が一番。青春自体って言うかんじで。女子高生がマスコミでもてはやされているから楽しいっていうんじゃない、それと関係なくて学生のときが一番。

杉5: ミニスカとか40代じゃはけない。あとおまけしてもらえるとか、若いから許されるって言うようなこと。多少常識がなくてもそんなに怒られない。万引きしてもまだ若いって帰されたり。今の状況、楽しいんで。いろいろ言われるってことは、それほど注目されてるってことじゃないですか？それはなんだかんだ言って嬉しい。

杉6: <モテる、交友関係が広い>って書いたけどそれは女子高生だからじゃない。ひとにもよる。学校は自由でやりたいことがやれるのはそうだけど。でもこんなに騒がれなかったとしても女子高生は楽しいと思う。ギャルをやめたことで、むしろそういうことがなくなって、違う自分が増えた。内面的にプラスが増えたと思う。

<第二部>大人向け雑誌における<女子高生>関連記事分析

研究協力者 苜米地 伸、辻 泉、花田 智弘、岡井 崇之、久保田 京

I. 研究の概要と80～90年代の雑誌記事概観

A. 研究目的

第二部では、基本的には昨年度の研究目的を踏襲し、<女子高生>と大人向け雑誌との関連性について考察することを目的とする。1年次、2年次の研究を振り返ると、90年代全体での年次推移には、93～94年に一つのピークを迎え、もう一度96～98年にピークを迎えるという変化が見られた。この雑誌記事数の変化は、「ブルセラ」「援助交際」といった語彙を含んだタイトル及びリードの件数と比例するという傾向を示していた。そこで、昨年度までの研究と同様に、今年度の研究でも、大人向け雑誌の中で、<女子高生>がどのようにとらえられ、描かれているのかを、多角的に分析することが研究目的として設定される。より具体的に言うならば、<女子高生>が性的に商品化されていくその過程を、大人向け雑誌の記事を多様な視点から分析することによって、導き出していく作業ということになる。

1年次、2年次の研究を再検討していく中で、私たちに、新たな論点が浮かび上がってきた。それは、この90年代の傾向が、果たして全く「新しい」ものなのかということ、言い換えるなら「90年代に突然現れた現象なのか」という疑問である。もちろん、「ブルセラ」「援助交際」といった語彙が<女子高生>をめぐる雑誌記事のタイトル及びリードに出現したのが、90年代に入ってからであったことは、昨年度までの研究によって明らかである。しかし、そういった語彙のみではなく、それ以前、つまり80年代と比較して、内容的な変遷、書き手のジェンダーによる変化、あるいは記事の形式上の変化などはあったのか、それともなかったのか、ということの確認が必要となった。よって、今年度の分析においては、80年代の<女子高生>をめぐる雑誌記事につ

いてもその対象にした。

とりわけIでは、80年からの<女子高生>をめぐる雑誌記事について、その概観を提示することとしたい。

B. 研究方法

本研究で提示される雑誌記事の資料は、大宅壮一文庫の雑誌記事検索サービスを利用して収集したものである。主にその件名として、「女子高生」「少女売春」「10代の性」という主題のもとに検索を行った。また、87年以前の雑誌記事に関しては、CD-ROMによる検索が不可能であるため、手作業により<女子高生>に関係する主題を選択し記事を収集した。この87年以前の主題選択では、90年代の傾向性を踏まえて網羅的に雑誌記事の検索を行い、<女子高生>に関係する主題の中でも、逸脱行動や性行動に関係すると思われるものを中心に行った。そのため以下の分析にあたっては、次の二点を考慮に入れている。第一に88年を境として検索方法が異なるという点を考慮に入れて行っていることである。つまり、分析上、単純な比較はできないという制約がある。第二に上記の主題のうち「少女売春」「10代の性」という主題には、女子高校生以外の年齢層に関係した記事も含まれることである。

また以下の章では、特に雑誌記事のタイトルに焦点を絞った研究がある。タイトルは、一定の解釈とイメージをマスメディアに接触するオーディエンスに与えるという意味で重要なデータである。直接的に記事内容に接触することがなくても、特にタイトルによって、私たちはその言及対象についての解釈とイメージを手に入れることがあるからである。昨年度の研究報告書において論じた新聞広告、あるいは公共交通機関を利用する際に目にする中吊り広告など、タイトルは、読者以外の人々にとって関心を

払わずとも一定の情報を提示するものである。昨年度までの研究においても、タイトル及びリードに含まれる<女子高生>に関連する語彙の研究を行ってきたが、本研究でもタイトルを重要な研究対象の一つととらえている。

本研究で収集した雑誌記事資料についての概括的な情報を提示しておく。収集した雑誌は、計119誌であり、その雑誌名を以下に記しておく。冒頭にあるジャンル名は、それぞれ私たちが分析上便宜的に名づけたものである。

写真週刊誌:『Emma』『FOCUS』『FRIDAY(臨時増刊含む)』『FLASH(臨時増刊含む)』

中年男性向け週刊誌:『アサヒ芸能』『週刊現代』『週刊時事』『週刊実話』『週刊大衆』『週刊テーム』『週刊宝石』『週刊ポスト』『BIGMAN』

若年男性向け週刊誌:『月刊プレイボーイ』『GORO』『週刊プレイボーイ』『スコラ』『宝島』『平凡パンチ』『PENTHOUSE』

情報誌:『ACROSS』『angle』『アミューズ』『暮しの手帖』『ザ・テレビジョン』『SAPIO』『Switch』『DIME』『ターザン』『TOUCH』『日経エンタテインメント』『日経トレンド』『Bart』『ビジネス・インテリジェンス』『Views』『BRUTUS』『プレジデント』『Voice』『マルコポーロ』

新聞社および大手出版社刊行の週刊誌:『AERA』『朝日ジャーナル』『サンデー毎日』『週刊朝日』『週刊サンケイ』『週刊新潮』『週刊文春』『週刊平凡』『週刊明星』『週刊読売』『SPA!』『ニューズウィーク日本版』

読み物雑誌:『is』『潮』『噂の真相』『月刊Asahi』『言語生活』『現代』『週刊金曜日』『自由時間』『諸君』『新地平』『新潮45』『正論』『世界(臨時増刊も含む)』『選択』『太陽』『ダカーポ』

『宝島30』『知識』『中央公論』『創』『東京人』『鳩よ』『人と日本』『文芸春秋』『へるめす』『宝石』『リーダーズ・ダイジェスト』『論座』

女性誌:『アビタン』『uno!』『ELLE JAPON』『CREA』『クロワッサン』『コスモポリタン』『週刊女性』『JUNON』『主婦と生活』『主婦の友』『女性自身』『女性セブン』『新鮮』『素敵な女性』『non no』『婦人公論』『婦人と暮らし』『微笑』『マザーリング』『marie claire』『ミセス』『ヤングレディ』『レタス』

男性ファッション誌:『checkmate』『DENIM』『メンズノンノ』

専門誌:『OMNI』『経済界』『警察時報』『少年補導』『新・調査情報』『スクリーン』『政界ジャーナル』『ダ・ヴィンチ』『調査情報』『Number』『日経イメージ気象観測』『文学界』『マスコミ市民』『ミュージック・マガジン』

さらに、88年以降の雑誌記事に関しては前記した3つの主題のもとに検索したが、87年以前の雑誌記事を検索するにあたって、それに追加して選択した主題は次の通りである。

…族、青年の溜り場/10代/カミナリ・マッハ・暴走族/けんか・暴力一般/スケバン、番長/デート喫茶、エスコートクラブ/モーテル/愛人、妾/愛人バンク/芸者一般/校内暴力、家庭内暴力/高校一般/殺人事件一般/少年院/少年院など/少年犯罪/少年非行一般/性犯罪一般/性犯罪諸事件/青少年の自殺/痴漢/中・高生の就職/摘発、諸事件/同伴喫茶、レンタルルーム/毒物犯罪/日本映画・シ/美人局

C. 研究結果

昨年までの90~98年の年次推移に加えて、80年代の数も加えた結果が次の表である。

表1 全体記事件数の推移 (80~98年)

年	件数
80年	88
81年	82
82年	81
83年	76
84年	84
85年	94
86年	72
87年	75
88年	42
89年	34
90年	23
91年	29
92年	17
93年	135
94年	185
95年	86
96年	193
97年	241
98年	180
計	1817

この80年から98年までの〈女子高生〉に関連した雑誌記事件数の総数は、1817件であった。ここでは80年代の記事件数と関連すると思われる社会事象について、雑誌記事から得られた補足的な情報を提供しておく。80年はテレビドラマ『3年B組金八先生』が放映された年である。82年には、俳優である穂積隆信の『積木くずし』がベストセラーになった。85年には、「青少年育成条例」「淫行条例」の議論がなされた。86年には、当時のアイドルタレントであった岡田有希子が飛び降り自殺をしている。

D. 考察

以上の年次推移を眺めてみると、全体的に次のことが言えると思われる。まず第一に、80年から87年の間、〈女子高生〉に関連する雑誌記事の件数は、ほぼ70件から90件強の間で推移しているということである。一昨年度からの主題を採用したとしても、30件から50件強の件数であった。

この80~87年という期間の中でも、80~83年の

記事件数に関しては、『3年B組金八先生』の中での女子中学生が妊娠するという内容の放映が関係していると思われる。というのも、それと連動するかのよう、女子中学生の性を対象とした連載記事による件数があるためである。また84年までの連載記事について見てみると、女子中学生の性を扱ったものが、81年に2件、84年に3件と比較的多く見られる。それに対してこの期間に、女子高校生の性を扱った連載記事は、82年に1件と85年に2件であり、とりわけ85年のものは「青少年育成条例」制定の議論に関連していると思われる。

第二に、雑誌記事件数は、88年から92年までの5年間に、とりわけ90~92年の間に急激な落ち込みを見せていることが挙げられる。これが、研究方法で示したようなデータの収集方法によるものなのかどうかは、現段階では何も言えない。しかし、85年のいわゆる「第一次女子高生ブーム」(アイドルグループ『おニャン子クラブ』人気と『東京女子高制服図鑑』の出版)以降、とりわけ86年頃から、高校生をいわゆるトレンドセッターとする記事があるにもかかわらず、相対的に少ない件数であるのは興味深いところである。

第三に、前年度までの研究で述べたように、93年からの爆発的な雑誌記事件数の増加である。この93年以降の増加は、95年に減少しているが、96年からまた増え始め97年にピークを迎えるというものであった。この97年の件数は、「援助交際」という言葉の一般化と、その現象の問題化と軌を一にしたものであると言える。

上記のような3つの特徴の中でも、本章で特に記しておきたいのは、80年代における女子中学生の取り上げられ方である。80年代の雑誌記事においては、女子高校生よりもむしろ女子中学生の性行動の「変化」に目が向けられていた。例えば、85年の連載記事のタイトル「覚醒剤、売春、恐喝、殺人未遂…ここまで来た！女子中学生『戦慄の実態』」(『週刊サンケイ』)などは、前半部分だけを見れば、まるで90年代後半の〈女子高生〉に関係する雑誌記事、「援助交際」に関連する記事と変わらないものであるといえよう。

また、80年代に女子中学生を性的に扱う雑誌記事が相対的に多く見られることは、90年代の雑誌記事のみを調べることによって「性行動の低年齢化」が全体的に扱われていると把握することが過度の単純化にすぎないと示しているように思われる。つまり雑誌記事においては、93年の「ブルセラ」騒動以来<女子高生>の問題化が起こり、性行動が徐々に低年齢化している（例えばそれは「マゴギャル」という語彙で示されていた）と扱われていたとすることが、それほど強調すべき事ではないという観点を私たちに与えてくれる。結局、雑誌記事においては、思春期女子に対して、常に関心が払われていたのである。問題は、それがどのように扱われていたかということであり、それは当然オーディエンスに影響を与えており、なおかつ与えられてきたと考えるべきであろう。

こう考えると、80年代の雑誌記事において、女子中学生に関係する雑誌記事が相対的に多く存在することは、90年代のあの爆発的な<女子高生>に関連した雑誌記事の増加がやはり特筆すべきものであった、ということも示している。同じようなタイトルを持ちながらも、前者は雑誌記事数としては突出した伸びは見せず、後者は顕著な増加を見せている。今年度の研究によって収集したデータを加えた上で見えてきたものは、社会的な文脈が、<女子高生>をめぐる雑誌記事数およびその内容に影響を与えているのではないかという見通しである。このことをより説得的に論じていくためには、以下の章での詳細な分析を参照しながら、より大きな分析枠組が必要であると思われる。

E. 結論

以上、本章では80年から98年までの<女子高生>に関連する雑誌記事への概観を、主にその件数から述べてきた。全体的な記事数の推移としては、80年代にはほぼ一定の件数が見られ、90年代初頭に減少、そして、93年、94年に顕著な増加傾向を見せ第一のピークとなり、その後96年以降にもう一度大きなピークを迎えている。今次研究で明らかになったことは、80年代にも<女子高生>に関連する記事

が一定数あったこと、さらにその記事においては、相対的に女子中学生についての記事が多く見られたということである。このことが示しているのは、雑誌というメディアにおける、思春期女子に対する記事数の量的な持続性と、質的側面での変化である。本章では、その質的側面での変化について詳細に論じることができなかった。しかし、より十分な分析をするには、その社会的な文脈なども考察に加えることによって論じていくことができるのではないかと思われる。雑誌記事数から言えるのはここまでであり、その質的な分析に関しては後の章にあるいはさらなる研究に譲り、筆を置くこととする。

(文責 苔米地 伸)

II. “驚き” から “連載” へ

A. 研究目的

ここでは、まず 1980 年代～90 年代におけるメディア情報の時系列的な変化を分析し、その結果から各時代において〈女子高生〉という事象がどのように伝えられていたのか、明らかにすることを目的としている。そのために週刊誌の〈女子高生〉関連記事¹のタイトルから特徴的な 2 つの形態を導き出し、その量的および質的な変化をとらえていく。

その特徴的な 2 つの形態とは、後に“驚き”と“連載”と名付けるものである。事象が報じられ始める時は、まさにここで対象とする週刊誌の記事タイトルに「衝撃」「仰天」などといった言葉がよく含まれるように、驚きをもたれることが多い。であるならばそうした言葉の含まれる記事タイトル（後に“驚き”と名付ける）を見ていくことで、〈女子高生〉という事象について、いつ、何に対して驚きもたれていたのかがわかるだろう。だが多くの場合、驚きは時間とともに薄れていく。そうした時、代わって多く見られるものとして、例えば連載記事やパターン化したコーナー記事がある（後にこれらのタイトルを“連載”と名付ける）。この場合、事象は驚きが薄れて、ある意味、当たり前のものとして扱われるようになったと考えるのだが、ならばこうした記事タイトルからは、〈女子高生〉という事象が、いつ、どのようなことについて当たり前のものとされていたのかを知ることができるであろう。

「ブルセラ」「援助交際」といったキータームの広がりが見られるように、1990 年代に入って〈女子高生〉にまつわる性行動²の“敷居”が下がったのではないかと、本研究プロジェクトでは指摘してきた。ここでは、週刊誌の〈女子高生〉関連記事のタイトルについて、1993 年に“驚き”がピークを迎え、その後で“連載”が増加していくという点から、その指摘を裏付けていくこととなる。また、1990 年代の分析の比較対象として 1980 年代にまで分析のスパンを広げている。予想される通り、〈女子高生〉という事象は性的に伝えられることが多いのだが、性的に伝えられると言っても、それは決して一様なも

のではない。その中でも、いつ、何に対して驚かれていて、いつ、どのようなことについて当たり前とされていたのかを、時系列的に正確に把握していく。

B. 研究方法

その際に分析の対象となる記事のタイトルだが、これらは記事を分かりやすくまとめるだけでなく、目立たせるためという目的もあり、さらにはまたそのコンパクトさからしても、上記したような目的の分析には有用な対象である。ここでは、1980 年から 98 年までの週刊誌 18 誌の〈女子高生〉関連記事、合計 1111 件のタイトルを分析対象としている。

まず対象とする週刊誌の選定方法であるが、『雑誌新聞総かたろぐ』において「一般週刊誌」および「女性週刊誌」という分野に含まれる雑誌のうち、ここでの分析においては不相当と思われるものを除外して残った 18 誌を選定した。ここで選定された週刊誌名とその発行部数³など、さらに各誌の年次ごとの〈女子高生〉関連記事事件数については、次ページの表 1 をご覧いただきたい。

また表においては、それぞれの週刊誌がいかなるものであるのか分かりやすくするために、主に対象としている読者、発行元、記事の特性、創刊年などを考慮した上で、「男性週刊誌」「新聞社系週刊誌」「女性週刊誌」「写真週刊誌」「後発週刊誌」といった分類を筆者が恣意的に行なっている。だが、これらの分類については、あくまでこの表における参考程度のものであり、以下の本文では特に触れないということを付記しておきたい。なぜならば、確かにつぶさに見た場合にはこうした分類間にも、興味深い相違は見出せるのだが、むしろここでは、全体的で大きな時系列的変化をとらえることを第一の目的としているからである。

そして、さらにまた、表にもあるように以下の本文においては、時系列的な分析をより分かりやすくするため、対象とする期間（1980年～98年）も4つの時期に分類することになっている。その分類の方法とは、主に記事数が増減や、「ブルセラ」「援助交際」といったキーワードが注目されていた年次を元にしたものである。この観点からすると、まず1980年～87年が、年間記事数がほぼ40～50件程度で推移する時期として導かれ（Ⅰ期）、続いて、記事数が他と比べて少ない時期として1988～92年が導かれる（Ⅱ期）。そしてさらに、1993～95年が「ブルセラ」というキーワードが注目されて記事数がやや多くなっている時期として導かれ（Ⅲ期）、最後に1996～98年が「援助交際」というキーワードの元に記事数が常に年間100件を超える時期として導かれることとなる（Ⅳ期）⁵。表2は、その4つの時期と記事数、および各時期における一年間あたりの平均記事数をまとめたものである。

表2. 4つの時期と記事数

時期	記事数	年間平均記事数
Ⅰ期(1980年～87年)	413	51.6
Ⅱ期(88～92)	76	15.2
Ⅲ期(93～95)	219	73.0
Ⅳ期(96～98)	403	134.3
合計	1111	58.5

上記したようなその時期の時代背景などを考慮して、以下においては主に、他の時期と比べ記事数が大きく減っているⅡ期を除いた3つの時期、すなわちⅠ期、Ⅲ期、Ⅳ期に注目しながら論じていくこととする。

C. 結果と考察

1. メディアが“驚く”とき

1-1. “驚き”の増減

まず注目するのは、「衝撃」や「仰天」といった言葉の含まれる記事タイトル⁶である（以下、単に“驚き”と呼ぶ）。とりわけ、こうした表現は週刊誌において盛んに見られる。では、〈女子高生〉について

は、いつそれが多く見られたのだろうか。表3は、“驚き”についての、時系列的な増減を表したものである。

表3. 年次・時期別の“驚き”の記事数

時期	年	“驚き”		総記事数
		件数	割合	
Ⅰ期	80年	6	12.2%	49
	81年	6	11.5%	52
	82年	9	15.3%	59
	83年	8	11.9%	67
	84年	9	18.0%	50
	85年	8	15.7%	51
	86年	3	6.4%	47
	87年	2	5.3%	38
Ⅰ期合計		51	12.3%	413
Ⅱ期	88年	7	25.0%	28
	89年		0.0%	9
	90年	3	23.1%	13
	91年	4	25.0%	16
	92年	1	10.0%	10
Ⅱ期合計		15	19.7%	76
Ⅲ期	93年	25	33.3%	75
	94年	20	20.4%	98
	95年	6	13.0%	46
Ⅲ期合計		51	23.3%	219
Ⅳ期	96年	23	15.9%	145
	97年	14	9.9%	141
	98年	6	5.1%	117
Ⅳ期合計		43	10.7%	403
総合計		160	14.4%	1111

総合計に占める割合が14.4%と決して少なくない数となっていることも目を引くが、むしろここで注目すべきは以下の2点であろう。第一に、Ⅰ期では1986～87年を除いてほぼ10%台で割合に大きな増減のないこと。そして第二に、Ⅲ期で割合が増えていること（特に1993年は33.3%と最も多い）であり、逆にⅣ期にはそれが一気に減っているということである（1998年にはわずか5.1%）。言い換えれば〈女子高生〉は、まずⅢ期に最も“驚き”を集め、

それがⅣ期に至って薄れていったということであろう。そしてまた、Ⅰ期においては、奇妙な表現になるのだが、一定の安定した“驚き”が持続していたのだという様子が窺える。ではこうしたⅠ期やⅢ期では、何に対して、“驚き”がなされていたのだろうか。

1-2. Ⅰ期の“驚き”～付随することに対して…

では次に、それぞれの時期の特徴的な“驚き”の具体例を引いて、その対象となっていることがらに注目しよう。まずⅠ期であるが、この時期は＜女子高生＞の性行動について、そのものというよりもむしろ、それに付随することがらに“驚き”がなされている。特徴的なのは以下に挙げたように、その非行性、買春する男、低年齢化あるいは健康面などである。とりわけ非行という点は特徴的だが、付随することがらに“驚き”が集まるのは、＜女子高生＞の性行動といった事象が、“驚き”を見せるまでもなくすでに一定の存在となってしまっているということを示唆しているものと思われる。

このことは、ほぼⅠ期を通してその割合の増減の少ないことから窺えるのだが、つまり例えて言うならば「一部の非行少女たちや大人がしていること」というような伝えられ方がパターン化していたものと思われる。よって、“驚き”の対象自体もまた、Ⅰ期の中で変化は見られない。

・非行への“驚き”

記事タイトル (『雑誌名』掲載号)
激発する少年犯罪シンドローム 性風俗が性非行に!“日常の遊び”で稼ぐ女の心の「濡いたSEX」 (『週刊大衆』1982・12・13)
立松和平のショッキング報告 普通のコが突然! 女子中高生の「性と暴力」恐るべし【立松和平】 (『週刊現代』1985・3・2)

・買春する男性への“驚き”

総括大特集 '85衝撃事件とその後のドラマ「淫行」適用第1号 中学教師、嘆願書が出たのに旧悪ポロポロ (『アサヒ芸能』1985・12・26)
ア然! 竹中組組長14歳少女を淫行で逮捕! (『週刊大衆』1986・10・20)

・低年齢化への“驚き”

衝撃の事件レポート なんと12才、小学6年生の少女が30日間17人の男と売春を! (『女性自身』1984・6・21)
--

ショック! 小中学生8000人調査「わが子の性」はここまでできた (『週刊現代』1985・5・11)
--

・女性の健康面への“驚き”

中3の少女がなんとタクシーの中で9ヶ月の男児を出産! (『女性自身』1981・12・10)

女の新聞・第3面 妊娠転校・妊娠退学を防ぐ「隠れ中絶族」が激増! (『女性自身』1982・2・11)
--

1-3. Ⅲ期の“驚き”～＜女子高生＞の性行動、そのものに対して…

一方、“驚き”が急増していたⅢ期では、Ⅰ期で“驚き”を集めていたようなことがらはすっかり影を潜め、むしろ“驚き”は＜女子高生＞の性行動そのものへと向けられている。以下に最も“驚き”の割合が多くなっていた1993年の記事タイトルから例を挙げてみたが、確かに金額や所属学校といったことがらは多く登場するものの、“驚き”の焦点はむしろ、そうした金額によっては、あるいはまたそうした所属学校にもかかわらず、性行動がなされてしまうということ、それ自体にあるといえるだろう。つまり、より踏みこんで述べるならば、Ⅰ期のように「一部の非行少女や大人がしていること」といった伝えられ方がパターン化していた状況と違って、Ⅲ期では「金額によっては、決して一部ではない多数(名門の生徒までも)がしてしまうことになりつつあるのではないか」という“驚き”が大きく湧き上がっていたということが窺えるのである。こうした大きな“驚き”はⅠ期と比べると長く続きはせず、Ⅳ期に入ると薄れる。

・＜女子高生＞の性行動、そのものへの“驚き”

世紀末大画報16回恥ずかしくないと売れないからね※下着を平気で見せる女子高生【TOMMY鈴木】 (『SPA!』1993・5・12)

お金になるんだからラッキー。とアツケラカンなんと110人も補導されたブルセラ女子高生AV出演の撮影現場! (『週刊宝石』1993・9・2)

ワイド平成の「謎」③「ブル・セラ」補導ぐらいで驚いちゃダメ名門女子高生・出演「AVビデオ」の凄いい中身 (『週刊ポスト』1993・9・3)

座談ブルセラ売春女子高生仰天座談会「私たちに10万円払うオジさんたちってホントおかしい」 (『週刊ポスト』1993・10・22)
--

ホテル?3万円ならOKよ!, 本物現役女子高生デートクラブの過激度 (『週刊宝石』1993・12・16)

2: “驚き” から “連載” へ

2-1. “連載” の増減

次に注目するのは、連載記事やパターン化したコーナー記事のタイトル⁸である (以下、単に “連載” と呼ぶ)。表4は、“連載” についての、時系列的な増減を表したものである。

表4. 年次・時期別の “連載” の記事件数

時期	年	“連載”		総記事件数
		件数	割合	
I 期	80年	10	20.4%	49
	81年	13	25.0%	52
	82年	15	25.4%	59
	83年	20	29.9%	67
	84年	21	42.0%	50
	85年	14	27.5%	51
	86年	10	21.3%	47
	87年	6	15.8%	38
I 期合計		109	26.4%	413
II 期	88年	6	21.4%	28
	89年	3	33.3%	9
	90年	1	7.7%	13
	91年		0.0%	16
	92年	1	10.0%	10
II 期合計		11	14.5%	76
III 期	93年	19	25.3%	75
	94年	25	25.5%	98
	95年	5	10.9%	46
III 期合計		49	22.4%	219
IV 期	96年	58	40.0%	145
	97年	47	33.3%	141
	98年	62	53.0%	117
IV 期合計		167	41.4%	403
総合計		336	30.2%	1111

ここではまず総合計に占める割合が 30.2%と、“連載” が週刊誌の <女子高生> 関連記事の中で大きな地位を占める形態のひとつであることが窺える。そしてまた注目すべき点は2つである。まず I 期で

は 1984 年と 87 年を除いて “驚き” と同様、割合の変化が少ないということ。そして次に、“驚き” の割合が大きく減っていた IV 期で、逆に “連載” は大きく割合を増やしているということである (“驚き” が 5.1%であった 1998 年で “連載” は 53.0%にもなる)。

“驚き” と対照的に “連載” が増えるということは、事象がむしろ当たり前のものとされてきたことを表しているのではないかと先に述べた。では、こうした I 期や IV 期において <女子高生> の何が、当たり前のものとされていたのだろうか。見ていくこととしよう。

なお、ここで一点だけ注意すべき点を付記しておきたい。それは、“驚き” と “連載” はそれぞれ別々の基準で選定しているために、重複しているケースがあるということである。しかし、詳細についてはこの後、5 において記すのだが、確かに一部の年次においてはやや重複も見られるものの、基本的にはそれぞれの形態の、割合の増減をそのまま分析して差し支えない程度であると考えられる。

2-2. I 期の “連載” ～一部のできごとが…

ではそれぞれの時期の、“連載” の具体例を引いて論じていこう。まず I 期であるが、以下の例に見られるように、その対象となることからは先の “驚き” とほぼ同様となっている。すなわち、非行性、犯罪性、あるいは買春する男性、低年齢化についてなどといった、<女子高生> の性行動に付随することからについての “連載” が I 期を通してみられる。このように I 期では、同じ対象が “驚き” にも “連載” にも見られ、かついずれも割合の変化が乏しかった。よってこの時期を通してみると、<女子高生> の性行動について、何がしかの大きく新たな事象が生じたというよりも、むしろ「あくまで一部においてなされていること」という伝えられ方がパターン化して持続していた、ということがいえるだろう。つまり、時には “驚き” で、また時には “連載” で伝えられることが、ある意味安定したペースで繰り返されていたのである。

・非行、犯罪性についての “連載”

男と女の事件調書 売春シンジケートのカゲもちらつく、美人女高生絞殺までの身辺 (『アサヒ芸能』1980・3・27)
特集連載 衝撃実態特集 女子中学生のSEX犯罪 (『週刊大衆』1984・6・11)

・買春する男性についての“連載”

黒い報告書 暴力団組長への“献上品”となった「制服の女高生」【粉川宏】 (『週刊新潮』1981・7・16)
男と女の事件調書 少女百数十人にイタズラ…銀行支店長代理が残した犯行メモ、録音テープ (『アサヒ芸能』1985・8・15)
黒い報告書 “青い性”に取り憑かれた院長の「天国」と「地獄」【梶野豊三】 (『週刊新潮』1986・2・20)

・低年齢化についての“連載”

男と女の事件調書 「トルコ就職」した中卒少女15歳、補導までの140人荒稼ぎ (『アサヒ芸能』1982・10・21)
連載 ここまで来た！女子中学生の性 (『週刊大衆』1984・3・12)

2-3. IV期の“連載”～<女子高生>の性行動、そのものが…

一方、1990年代に入ると、まずⅢ期に“驚き”が急増した後、Ⅳ期には激減し、代わって“連載”が急増していた。その対象となることからⅠ期とは異なる。以下に例示しているが、端的にはⅢ期で“驚き”の対象であったことが、Ⅳ期では“驚き”の言葉も少なく“連載”で扱われている。すなわち<女子高生>の性行動そのものが、Ⅲ期ではまだ“驚き”として報じられていたのに対し、Ⅳ期では当たり前のこととして“連載”されるにいたったのである。

つまり、「もはや一部、少数のすることではなく、例えば金額によっては多数がそうした性行動をするということ」それ自体が、もはや“驚き”が薄れ、ある意味当たり前のこととして伝えられるように変化したのだといえるだろう。

・<女子高生>の性行動、そのものについての“連載”

街のコギャルナマナマ10連発1回援助交際食って歌ってHなし、これがエンコー技!※コギャルが教える援助交際の手口 (『アサヒ芸能』1997・5・15)
街のコギャルナマナマ10連発7回売春(ウリ)中学生が安くウるから、チョー不景気!※女子高生の売春談 (『アサヒ芸能』1997・6・26)
街のコギャルナマナマ10連発9回アダルトグッズ快感グッズって興味津々、なんでも試すよん (『アサヒ芸能』1997・7・10)

いまだき女子高生日記オジさんにもホンネ話して! 1回 卒業職権今だからバラしちゃう綾子ちゃん(18)の反省 伝言ダイヤルにTEL。ラブホ直行 (『週刊宝石』1998・3・19)
--

いまだき女子高生日記オジさんにもホンネ話して! 2回 ホワイトデーの総決算 真澄ちゃん(18)の収穫 ブランド物のお礼はもちろんエッチ (『週刊宝石』1998・3・26)

いまだき女子高生日記オジさんにもホンネ話して! 4回 バイトで稼ぎまくる春休み!亜稀ちゃん(17)の激務パンティはその場で脱いで即売り (『週刊宝石』1998・4・9)
--

D. 結論

以上のように、ここでは週刊誌の<女子高生>関連記事タイトルの中から、“驚き”と“連載”という2つの特徴的な形態(総合計に占める割合はそれぞれ14.4%/30.2%、以下それぞれのパーセンテージには重複ケースも含む)を導き出しその時系列的な、数量や言及対象の変化に注目して論じてきた。まず、その時系列的な量の変化についての、それぞれの表をまとめたのが表5である。

すでに触れたように、注意すべき点としては、“驚き”と“連載”が重複しているケースがある。総合計に占める割合は3.8%と少ないので、さほど気に止める必要もないのだが、“驚き”の割合が最も多くなっている1993年だけは重複しているケースも16.0%とやや多い。しかしながら、表からすると、これは1993年だけに見られることであり、その後の年では重複は大きく減っている。よって先に見たように、1993年とは<女子高生>に新たな大きな“驚き”が寄せられ始めた年であり、ここでの重複ケースもどちらかと言えば“驚き”に含めうるのではないかと思われる。すなわち、あまりにも大きな“驚き”が集中したがゆえに、それをあるひとまとまりとして“連載”のかたちで報じるにいたったのではないかと。さすれば、重複ケースを考慮に入れてもここまでの分析の妥当性は変わるものではないだろう。

・1993年の“驚き”と“連載”の重複ケース

独占!ブルセラ女子高生「衝撃の性」① 女子高生「売春クラブ」56人補導!会員少女が語った「5万円のSEX」 (『アサヒ芸能』1993・9・30)
女子高生300人を脱がせた「ブルセラ帝王」衝撃の獄中手記! 2回 本番撮影現場の隣室で試験勉強をする少女たち【辻幸雄】 (『アサヒ芸能』1993・11・4)

表5. 年次・時期別の“驚き”“連載”の記事件数

時期	年	“驚き”		“連載”		重複ケース		総記事 件数
		件数	割合	件数	割合	件数	割合	
I期	80年	6	12.2%	10	20.4%	0	0.0%	49
	81年	6	11.5%	13	25.0%	2	3.8%	52
	82年	9	15.3%	15	25.4%	2	3.4%	59
	83年	8	11.9%	20	29.9%	0	0.0%	67
	84年	9	18.0%	21	42.0%	5	10.0%	50
	85年	8	15.7%	14	27.5%	1	2.0%	51
	86年	3	6.4%	10	21.3%	1	2.1%	47
	87年	2	5.3%	6	15.8%	0	0.0%	38
I期合計		51	12.3%	109	26.4%	11	2.7%	413
II期	88年	7	25.0%	6	21.4%	0	0.0%	28
	89年		0.0%	3	33.3%	0	0.0%	9
	90年	3	23.1%	1	7.7%	0	0.0%	13
	91年	4	25.0%		0.0%	0	0.0%	16
	92年	1	10.0%	1	10.0%	1	10.0%	10
II期合計		15	19.7%	11	14.5%	1	1.3%	76
III期	93年	25	33.3%	19	25.3%	12	16.0%	75
	94年	20	20.4%	25	25.5%	3	3.1%	98
	95年	6	13.0%	5	10.9%	1	2.2%	46
III期合計		51	23.3%	49	22.4%	16	7.3%	219
IV期	96年	23	15.9%	58	40.0%	13	9.0%	145
	97年	14	9.9%	47	33.3%	1	0.7%	141
	98年	6	5.1%	62	53.0%	0	0.0%	117
IV期合計		43	10.7%	167	41.4%	14	3.5%	403
総合計		160	14.4%	336	30.2%	42	3.8%	1111

それでは、特に注目してきたI期、III期、IV期について振りかえってこよう。

・“驚き”と“連載”が並存する1980年代

まずI期では、端的に言えば<女子高生>の性行動について、「一部、少数が当たり前のようにしていること」という伝えられ方がされていたということが明らかになった。このことは、まず“驚き”が、I期を通して<女子高生>の性行動そのものというよりも、むしろそれに付随することが、すなわち非行性、買春する男性、あるいは低年齢化などへ向けられていて、また同様に“連載”もまたI期を通してそうした対象を扱っていたこと、そしてそれぞれの割合の変化が少なかったことから窺えた。つま

り、「一部、少数が」ということに対して“驚き”が、「当たり前のようにしていること」について“連載”がそれぞれなされたのだといえるだろう。これが、I期にほぼ含まれる1980年代という時代における、<女子高生>という事象の伝えられ方の特徴だといえる。

また一点だけ付記するならば、一般的には1990年代に至って性の低年齢化が進んだと思われるのかもしれないが、実態はともかくも、今回分析した記事タイトルからすると、そうした性の低年齢化、それ自体が“驚き”や“連載”の対象となっていたのは、むしろ1980年代であるI期であって、1990年代のIII期やIV期にはもはやそうした傾向が見られなくなっていたという点は興味を引いた。

・“驚き”から“連載”へ大きく変化した1990年代
次にIII期に入ると、大きな“驚き”が生起していた。またその対象も、付随することがから、むしろ<女子高生>の性行動そのものへと“驚き”がなされるようになり、「一部、少数がすること」という“驚き”はもはやなくなり、例えば「金額によっては多数もがしてしまうこと」になりつつあるのではないかという“驚き”がわきあがっていたのである。量的にもこの時期が最も“驚き”の割合が多かった(1993年には33.3%)。

そして、IV期に入るとそうした“驚き”は薄れていて、代わって“連載”が急増していた(1998年には“驚き”が5.1%であったのに対し、“連載”は53.0%)。この“連載”で扱われていた対象は、まさにIII期には“驚き”がなされていたものであって、すなわち、<女子高生>の性行動そのものであった。

まとめるならば、<女子高生>の性行動について、I期においてそれ自体は「一部、少数がすること」としてある意味当たり前のように受け取られていて“連載”がなされたり、あるいは「一部、少数が」という付随することについて、“驚き”がなされていた。それがIII期においては、そのこと自体が「もはや一部、少数がすることではなく、金額によっては多数もがしてしまうかもしれないことになりつつあるのではないか」と“驚き”をなされるようになって

たのである。そして、IV期に至るに、そのことについて、もはや“驚き”は薄れて、当たり前のこととして“連載”がなされるようになったのである。

とりわけⅢ期、Ⅳ期の含まれる1990年代という時代におけるこうした変化については、まさにはじめに目的としていた、〈女子高生〉の性行動についての“敷居”が下がったのではないかという指摘をほぼ裏付けるような結果が導かれたのではないかと思われる。

最後に、何点か記しておこう。ここでは、メディア情報を時系列的に分析し、各時代において〈女子高生〉という事象がどのように伝えられていたのかを見てきた。だが、あくまでそれは伝達される情報の側を見たのであって、実際にどのように受容されたのかについては間接的に推し量ったものであるに過ぎない。とりわけ〈女子高生〉の性行動については、成年男性の存在は大きく、彼らがこうしたメディア情報を実際にはどのように受容したのかという点に直接アプローチすることの重要性は今後とも考えていかななくてはならないだろう。

またそうした場合には、ここで扱ったのは記事タイトルであるが、さらに記事の内容へもメディア情報の分析を広げていく必要があるし、また先にも触れたように、様々なメディアごとの伝えられ方の違いにも目を向けていかなければならないだろう。

しかしながら、各時代において〈女子高生〉という事象がどのように伝えられていたのか、その特徴を明らかにするという当初の目的は達したものとして分析を終えることとしたい。

(文責 辻 泉)

1 〈女子高生〉関連記事についての詳細はI章参照。

2 ここでいう性行動としては、広義によりむしろ、1990年代の「ブルセラ」「援助交際」のような、各時代において問題視されてきたようなそのことを念頭に置いているということを付記しておく。

3 除外した雑誌とその理由は以下の通り。

・『アサヒグラフ』、『週刊金曜日』～販売形態が他の週刊誌と比べかなり異なるので除外

・『週刊実話』～該当雑誌記事が97、98年の2年分

しかないので除外

・『ニューズウィーク日本版』、『TIME』、『anan』、『クロワッサン』、『non-no』、『Hanako』～記事の特殊性から筆者の判断で除外

・『アミューズ』、『ダ・カーポ』～隔週刊なので除外
4 表1に記載されたそれぞれの週刊誌のデータ(発行部数、創刊年など)については、『雑誌新聞総かたろぐ1999年版』を元にした。

5 またデータベースの事情から、1987年以前については手作業、1988年以降はCD-ROMによる検索と、検索方法が違っているという点も付記しておきたい。

6 具体的には以下のような言葉の含まれるものを選び出した。①2字程度の熟語で驚きの意味があるもの(衝撃/世紀末/真っ青/異常/過激/激発/仰天/驚愕/大騒動/激増)、②それ以上の文字数や、文末の強調から驚きの意味があるものなど(ここまで乱れきった/ショッキング/ショック!/なんと/驚くべき/ここまできた!/ア然!/イタズラ!/～しちゃった!/仰天驚く/凄まじい/エッ/ああなんと/すごい/暴行!/ああ/驚く)

7 I～IVの各時期において、“驚き”の件数が1誌あたり5件以上になる週刊誌の、記事タイトルを抜粋しさらにその中から代表的なものを挙げている。記事タイトルの具体例の選び出し方については、次の“連載”についても同様。

8 具体的には以下のように選び出した。

①「連載…」 「…第1回」など、明らかに連載記事と認められる記事を選定。(例)「連載 女子高生性態レポート よい子たちの放課後(『週刊大衆』)」、「いまだき女子高生日記オジさんにもホンネ話して!1回(『週刊宝石』)」

②〈女子高生〉そのものを対象としたものではないが、1980年～98年を通して、2回以上〈女子高生〉が扱われているコーナー記事を選定。(例)「男と女の事件調書(『アサヒ芸能』)」、「黒い報告書(『週刊新潮』)」、「中森文化新聞(『SPA!』)」

Ⅲ. <女子高生>記事と規範

A. 研究目的

ここでは、<女子高生>がメディアの中でどのように語られてきたか、その意味付けと伝え方の分析を行う。

<女子高生>に限らず、すべての雑誌記事はある現象のみで成立しているわけではなく、その現象をいかなる形で伝えているのか、という伝え方の部分との複合物として成立している。その伝え方の部分を分析することによって、たとえば<女子高生>という存在がどのように意味付けられているのか、を知ることができよう。

本稿では、メディアの中で<女子高生>がどのように描かれてきたか、その意味付けのなされ方に焦点をあてる。また、そのような描かれ方には、どのような社会背景が影響を及ぼしているのか、すなわち、社会と<女子高生>記事の相関関係の試論を展開する。

B. 研究方法

Ⅱ章にて記した作業から得られた週刊誌 18 誌の 80 年から 98 年までの記事 1111 件の<女子高生>記事²に対して、そのタイトルから性的／非性的、の二種類に分類した。次に挙げるタームがタイトルに含まれるものを「性的」記事、含まれないものを「非性的」記事と分類した。

「性的」記事のターム：

性／SEX／売春／わいせつ／淫行／レイプ／援助交際／デートクラブ／テレクラ／伝言ダイヤル／ブルセラなど³

その上で、記事タイトルの検討を行い、その描かれ方から類型化を図り、四つの類型を得た。

- ①「社会的逸脱行為記事」：ある行為を社会的に認められない逸脱行為だとして伝える記事
- ②「親子関係記事」：親としての教育方法などを伝える記事
- ③「流行関連記事」：高校生の中で何が流行しているかを伝える記事
- ④「グラビア記事」：写真を中心に構成された記事

なお、これら類型に収まらないものが全体の 1% 弱（記事数 11 件）あり、これらを「その他」に含めた。「その他」は、<女子高生>であることよりも、個人としての属性が中心的で、その個人がたまたま<女子高生>であった、という類の記事である。

【「その他」に含めた記事例】

記事タイトル（『雑誌名』掲載号）、以下同
お嬢さま学校に通い、モトクロスでも活躍猛追「逆転優勝」の17歳現役女子高生※栃木県宇都宮市 海星女子学園の豊田亜美さん（『FOCUS』1997・11・5）
inshort…JAPAN歌会始39年ぶりの高校生※大阪府河内長野市、明浄学院高校2年生の佐藤美穂さん（『AERA』1998・1・26）

以上の作業から得られた知見を、それぞれ見ていくことにする。

なお、それぞれの表については、4 つの時期区分（80 年～87 年／88 年～92 年／93 年～95 年／96 年～98 年）を設定し、各期の総数も挙げた³。

C. 研究結果

1. 「性的」記事の蓋然性

タイトルに使われるタームから性的／非性的に分類、年次推移を表したのが、次ページの表 1 である。

Ⅲ期以降、「ブルセラ」「援助交際」など大きくクローズアップされた観のある<女子高生>だが、実際には 80 年代前半でもかなりの記事数が存在し、なおかつ、<女（子）高生>⁴が、性的な表象として取り上げられることが多かったことがわかる。

また、記事タイトルからも、決して 90 年代の「ブルセラ」や「援助交際」は特異ではないことがわかる。

売春女高生 この淋しい獣たち（畑山博）（『週刊文春』1979・8・2）

この記事は 79 年の週刊誌記事だが、タイトルからは 90 年代の<女子高生>報道である、と言われても納得できるようなものである。

本プロジェクトでの雑誌記事検索が「性」に注目しているためでもあるが、<女子高生>の「性的」記事は、記事の中では一般的で、90 年代の<女子高生>に関する「性的」記事もその延長線上にある。

ゆえに、もしも 90 年代<女子高生>報道が特殊で

あったとするならば、性的／非性的という弁別軸は、それほど有効なものではない。記事類型の基準を他に設定しなければならない。

表1. 性的／非性的記事の年次推移

年	性的		非性的		全数	
	件数	割合	件数	割合		
I期	80	44	89.8%	5	10.2%	49
	81	47	90.4%	5	9.6%	52
	82	55	93.2%	4	6.8%	59
	83	61	91.0%	6	9.0%	67
	84	44	88.0%	6	12.0%	50
	85	42	82.4%	9	17.6%	51
	86	26	55.3%	21	44.7%	47
87	35	92.1%	3	7.9%	38	
I期計		354	85.7%	59	14.3%	413
II期	88	23	82.1%	5	17.9%	28
	89	8	88.9%	1	11.1%	9
	90	10	76.9%	3	23.1%	13
	91	12	75.0%	4	25.0%	16
	92	7	70.0%	3	30.0%	10
II期計		60	78.9%	16	21.1%	76
III期	93	71	94.7%	4	5.3%	75
	94	83	84.7%	15	15.3%	98
	95	30	65.2%	16	34.8%	46
III期計		184	84.0%	35	16.0%	219
IV期	96	125	86.2%	20	13.8%	145
	97	112	79.4%	29	20.6%	141
	98	74	63.2%	43	36.8%	117
IV期計		311	77.2%	92	22.8%	403
総計		909	81.8%	202	18.2%	1111

2. 記事四類型—その知見と問題点

そこで、別種の分類を行った。記事タイトルによって四種類の分類を行ったが、タイトルのみからでは判断できないものについては記事内容までふみこみ、特に以下①～④の何を最も強く強調しようとしているのか、によって分類を行った。

①社会的逸脱行為記事

表2. 社会的逸脱行為記事の年次推移

年	社会的逸脱行為記事		全数	
	件数	割合		
I期	80	42	85.7%	49
	81	46	88.5%	52
	82	50	84.7%	59
	82	57	85.1%	67
	84	43	86.0%	50
	85	44	86.3%	51
	86	41	87.2%	47
87	32	84.2%	38	
I期計		355	86.0%	413
II期	88	19	67.9%	28
	89	6	66.7%	9
	90	8	61.5%	13
	91	11	68.8%	16
	92	6	60.0%	10
II期計		50	65.8%	76
III期	93	62	82.7%	75
	94	65	66.3%	98
	95	28	60.9%	46
III期計		155	70.8%	219
IV期	96	101	69.7%	145
	97	97	68.8%	141
	98	59	50.4%	117
IV期計		257	63.8%	403
総計		817	73.5%	1111

ここでの「逸脱行為」は、その中心点を法律で規定された「犯罪」とし、「犯罪」とは言えないが、社会倫理上許容されない行為を周辺にとる。

社会的逸脱行為記事は、全数で800件を超え、全体の70%以上がこの類型に含まれる。この記事で特徴的なのは、そのほとんどが性に関する「逸脱行為」である、ということだ（後出表6参照）。

<女子高生>の「逸脱行為」が注目される場合、そこには必ずといってよいほど「性」が絡んでいる。したがって、<女子高生>が取り上げられる際には、そのほとんどが「性における逸脱行為」という型もっている。<女子高生>と「性」と「逸脱行為」は、記事の中では、有縁的である。

事件風俗パトロール 避妊リングまでしていた惨殺女子中学生、親が卒倒する深夜の乱交(『アサヒ芸能』1982・6・24)
 京都・大阪元締めコギャル逮捕!大摘発!女子高生24人「売春サークル」の「3万円肉体サービス」!(『アサヒ芸能』1997・2・20)

この二つは、82年と97年の『アサヒ芸能』の記事であるが、両者のタイトルだけで言えば、むしろ82年の記事の方が過激であるような印象を与えるほどであり、ここ20年間「社会的逸脱行為記事」が一般的なタイプの記事として流通していたことがわかる。

②親子関係記事

表3. 親子関係記事の年次推移

年	親子関係記事		全数	
	件数	割合		
I期	80	1	2.0%	49
	81	2	3.8%	52
	82	2	3.4%	59
	82	5	7.5%	67
	84	1	2.0%	50
	85	0	0%	51
	86	1	2.1%	47
	87	1	2.6%	38
I期計		13	3.1%	413
II期	88	1	3.6%	28
	89	1	11.1%	9
	90	0	0%	13
	91	0	0%	16
	92	0	0%	10
II期計		1	1.3%	76
III期	93	1	1.3%	75
	94	0	0%	98
	95	0	0%	46
III期計		1	0.5%	219
IV期	96	2	1.4%	145
	97	1	0.7%	141
	98	3	2.6%	117
IV期計		6	1.5%	403
総計		22	2.0%	1111

ここでいう、親子関係記事の範疇に含まれるものは、対象とした週刊誌の主たる購読者である男性／

女性の、息子／娘に対する対応の仕方などについて触れたものである。ただし、その記事数は20年間で計22件(全数の約2%)と非常に少ない。

それでもあえて、ここで取り上げたのは、次のような理由による。

先に見たように、ここ20年間にわたり「社会的逸脱行為記事」は一般的な記事であり、そこからある時代の特殊性を導き出すことは不可能である。もし90年代の〈女子高生〉が、性的に逸脱した存在だとするならば、同様に80年代の〈女子高生〉もまた、性的に逸脱した存在である。そうでない、とするならば、社会的逸脱行為記事以外の補助線をひくことで、90年代の特殊性を説明しなければならないからである。

その補助線の一つとなるのが、この親子関係記事という類型である。80年代初頭に女性誌に見られたこの種の記事は、以下のようなタイプのものである。

人生の悩みなんでも相談ボックス43 子どものキスシーンにカリカリするな(『女性セブン』1983・6・9)
 人生の悩みなんでも相談ボックス59 小学校5年から高校2年まで 年齢別性の悩み10(『女性セブン』1983・9・29)
 人生の悩みなんでも相談ボックス66 高校生の「性」親の対処法10カ条(『女性セブン』1983・11・17)

扱われている「悩み」とは次のようなものである。

【相談】高1。私立女子高にかよう娘。街で声をかけられたという大学3年の男性と交際中なんです。金持ちの息子らしくプレゼントも高価なものばかりだし、きょうはドライブ、明日はホテルで食事と、ぜいたくな交際をしています。わたしは、相手の大学生は遊びでつきあっていると思うのですが、はたして、どう話したらよいのでしょうか。(『女性セブン』1983.11.17)

「悩み」を寄せた母親にとって、この「悩み」が重要なものであることはつゆほども疑い得ない。

が、一方でこの時期の同誌の「社会的逸脱行為記事」には次のようなものがある。

14才の実の娘に覚醒剤をうち売春までさせ生活費を稼がせていたハレンチ親父(『女性セブン』1982・6・3)

この記事と比較するならば、母親の「悩み」は、あまりにも牧歌的なものと言わざるを得ない。

このようなズレは、90年代「ブルセラ」騒動時には見られない。93年の同誌における「親子関係記事」は、次のようなものとなっている。

座談あなたの娘さん妹さんは大丈夫…?“ブルセラ”バイトだけじゃない女子高生のアプナイ放課後!現役高校生が衝撃告白ショッポ摘発、110人補導は氷山の一角!『女性セブン』1993・9・9)

93年の時点のこの「親子関係記事」は、社会的逸脱行為と関連性の強いものとなっている。

したがって、80年初頭における「親子関係記事」の問題とは、なぜ「社会的逸脱行為記事」との相互関連が行われていないのか、という点にある。あまりに著しい「社会的逸脱行為記事」とあまりに牧歌的な「親子関係記事」の間の溝、という問題を、80年代の記事から取り出すことが可能になる。

③流行関連記事

表4. 流行関連記事の年次推移

年	流行関連記事		全数	
	件数	割合		
I期	80	4	8.2%	49
	81	4	7.7%	52
	82	6	10.2%	59
	82	4	6.0%	67
	84	6	12.0%	50
	85	5	9.8%	51
	86	3	6.4%	47
	87	3	7.9%	38
I期計		35	8.5%	413
II期	88	6	21.4%	28
	89	2	22.2%	9
	90	3	23.1%	13
	91	3	18.8%	16
	92	3	30.0%	10
II期計		18	23.7%	76
III期	93	8	10.7%	75
	94	28	28.6%	98
	95	15	32.6%	46
III期計		51	23.3%	219
IV期	96	33	22.8%	145
	97	33	23.4%	141
	98	52	44.4%	117
IV期計		118	29.3%	403
総計		222	19.9%	1111

昨年度の報告で、「トレンドセッター記事」とした

記事分類だが、80年代にも近似のものがあり、概括し「流行関連記事」とした。

この類型は、90年代後半に増加する一方で、80年代にも一定数存在する。たとえば次のような記事。

10代が熱狂する新アイドル松本伊代や本木雅弘を知ってるか! (『週刊現代』1981・12・17)

この記事の延長線上に次の記事はある。

謎の大流行…女子高生の新アイドルは「死にかけ人形」これが本当に「かわいい」の?通学カバンにぶらさげるブルセラ世代の感性は脱帽もんだ (『FLASH』1994・1・25)

ここから「流行関連記事」も20年の間にわたり、一般的で特殊性を帯びない、とも言えるだろう。

しかし、そうであれば、90年代後半の増加ということへの理由説明が別に必要ともなってくる。

④グラビア記事

表5. グラビア記事の年次推移

年	グラビア記事		全数	
	件数	割合		
I期	80	1	2.0%	49
	81	0	0%	52
	82	0	0%	59
	82	0	0%	67
	84	0	0%	50
	85	1	2.0%	51
	86	2	4.3%	47
	87	2	5.3%	38
	I期計		6	1.5%
II期	88	1	3.6%	28
	89	0	0%	9
	90	1	7.7%	13
	91	2	12.5%	16
	92	1	10.0%	10
II期計		5	6.6%	76
III期	93	4	5.3%	75
	94	4	4.1%	98
	95	1	2.2%	46
III期計		9	4.1%	219
IV期	96	9	6.2%	145
	97	9	6.4%	141
	98	2	1.7%	117
	IV期計		20	5.0%
総計		40	3.6%	1111

85年以降、特に顕著に増加してきた、写真を中心とした記事である。この背景には、80年中頃までに出揃った写真週刊誌（『FOCUS』『FLASH』『FRIDAY』）の隆盛があるが、一方で男性週刊誌で、特に90年代後半＜女子高生＞がグラビアの中心に描かれるようになってきたという傾向が挙げられる。この種の記事の嚆矢となるのが次の記事である。

グラビア 女子大生なんてオバンよっ！「オールナイトフジ・高校生スペシャル」に3千人の応募者から選ばれたキャピキャピギャル10人のこれっきりセクシーショット（『週刊宝石』1985-5-10）

グラビア記事は特に90年代になって増加する記事であり、性的な内容に特化している。グラビア記事の85%が性的であり、有縁的である。無論、一般的にグラビア記事という形式自体が性的記事と多く重複しているわけだが、そのようなグラビア記事で＜女子高生＞が扱われるようになったことで、「性的商品化」が＜女子高生＞にまで進んできた、と言えるだろう。

以上、四類型の特徴を見た。

なお、「性的／非性的」の分類と四類型による分類をクロスさせた割合は次のとおりである。

表6. 性的／非性的×四類型

		性的／非性的		全数
		性的	非性的	
四類型	逸脱行為記事	769 94.1%	48 5.9%	817 100%
	親子関係記事	13 61.9%	8 38.1%	21 100%
	流行関連記事	91 41.0%	131 59.0%	222 100%
	グラビア記事	34 85.0%	6 15.0%	40 100%
その他		2 18.2%	9 81.8%	11 100%

D. 考察：＜女子高生＞への意味付け

前節にて行った類型化によって見られた知見と問題点を再度確認してみよう。

i タイトルを「性的／非性的」で弁別すると、「性的記事」が、全体の大部分を占めている。

ii 別種の弁別による類型化にて抽出した「社会的逸脱行為記事」も多い。

iii 「親子関係記事」は、80年代の記事では「社会的逸脱行為記事」との関連性が浅かったが、90年代では関連性がある。

iv 「流行関連記事」は80年代から存在するが、90年代後半に顕著に増加した。

v 「グラビア記事」は、「性的記事」と重なる部分が多く＜女子高生＞が性的に消費されている様を想定させる。

i / ii の詳細な検討はII章で行っているのので、iii ~ v の点について検討を加える。

iii から見ていこう。先に挙げた『女性セブン』の悩み相談記事に代表される親子関係は、親子の関係をどうすればよいのか、という悩みが中心である。つまり、親子の関係を透明性の高いものとするためにはどのようにすればよいのか、というのが、記事の中心的な話題である。

ところで、「社会的逸脱行為記事」と類型化した記事の内容をつぶさに見ていくと、そこには一つの特徴があることに気づく。『女性セブン』と同じ83年の『週刊朝日』の「社会的逸脱行為記事」を見てみよう。なお、この記事の場合、対象が＜13歳少女＞となっており⁵、＜女子高生＞とは若干のズレがあるが、ここではその差異は捨象する。

野次馬最前線 シャブ打たれモーテルで死んだ13歳少女の背景（『週刊朝日』1983-5-20）

タイトルのみから考えると、90年代のものと特に変化は見られないのだが、その記事内容をつぶさに見るならば、80年代にはある形式が存在することに気が付く。＜13歳少女＞が死ぬまでの経緯の説明に、次のような描写がなされる。

A 子さんの近所の人の話によると、A 子さんの両親は去年九月ごろ離婚。母親と姉の三人暮らし。父母が別れる前までは普通の子だったが、離婚したところから、徐々に学校を欠席するようになり、今年一月ごろからは、あまり姿を見せなくなった。

「社会的逸脱行為」は、家庭環境と強く結び付けら

れて描写される。《家庭環境の悪化→逸脱行為》という解釈が導き出されているのだ。このような解釈が与えられるのは、この記事だけのものではない。同年の『週刊現代』や『女性セブン』などでも同様の解釈が行われる。

人生の悩みなんでも相談ボックス38 17才非行少女 初めての愛へのとまどい(『女性セブン』1983・3・24)
家出、売春、心中、覚醒剤と事件続発「これが女子中学生の実態だ」(久保博司)(『週刊現代』1983・8・6)

その上でこの『週刊現代』の記事であれば、さらに次のような記述が準備される。

この夏は五つの非行サインに注意!

非行シーズンの夏休みが始まった。“普通の子”が非行に走るを防ぐ特効薬はないかもしれない。原因は家庭や学校や社会にあるからだ。

「非行」に対し、家庭環境の悪化という理由付けがなされ、その上でこのスパイラルを逆転させて、《家庭環境の改善→逸脱行為の未然防止》という対策が提示されることになるのである。

90年代の「ブルセラ」、「援助交際」では「家庭環境」と「逸脱行為」の相互関連は行われていない。

「社会的逸脱行為記事」の中から「家庭環境」という説明項目は除外されている。「ブルセラ」も「援助交際」も、その初期における描かれ方は、「社会的逸脱行為記事」のそれよりもむしろ「流行関連記事」の色彩の方が強い。

というのも、「ブルセラ」や「援助交際」の場合、それがなぜ逸脱しているのか、ということの説明は提示されておらず、その現象がどのようなものであるかを伝えるのみにとどまっているからだ。なぜ逸脱しているのか、という説明が最初から行われていないため、その現象の背景となる理由もまた記述されていないのである。このような意味で90年代の「社会的逸脱行為記事」は「流行関連記事」的なものとなっている。

説明と理由付けが行われない90年代の記事に対し、80年代初期に見られた「家庭環境」という説明項目による解釈図式を、ここでは「家族規範」と名づけてみよう。すると、「家族規範」が「親子関連記事」と「社会的逸脱行為記事」のそれぞれの底流に流れていると見なすことが可能になる。「親子関連

記事」の牧歌性と「社会的逸脱行為記事」の激しさという一見相反する80年代初期の記事は、「家族規範」という底流によって支えられているのである。

「家族規範」は、「親子関連記事」と「社会的逸脱行為記事」のみに見出されるわけではない。

ivの「流行関連記事」もまた、よくその記事内容に立ち入るならば、同型の記述を行っている。先に挙げた『週刊現代』81年の記事では「10代が熱狂する新アイドル松本伊代や本木雅弘を知ってるか!」と、10代の親である読者に訴える。つまり、家庭環境＝親子関係の高い透明度を維持するために、今子どもが何に興味を持っているか、ということが記事の要諦として描写される。この意味で「家族規範」によって裏支えされた記事なのである。

一方、同様に先に触れた90年代の「流行関連記事」である『FLASH』には、このような特性は見出されない。「ブルセラ世代の感性は脱帽もんだ」とく女子高生>は突き放されている。「家族規範」は消えているのである。90年代後半のく女子高生>は「家族規範」とは関係のない、いわば他者とも言えるような存在として描かれている。

vの「グラビア記事」の登場は、そのことを示唆する。85年以降現れてくる「グラビア記事」は、く女子高生>という属性が特化され、性的な意味付けをされる。さきに挙げた85年の『週刊宝石』は「高校生」であることと「性的」であることが結び付けられて描かれる。86年以降徐々に増えていくグラビア記事は、この流れと軌を一にしている。

グラビア 名門女子高通学バス・電車 乗ってみますか(『週刊現代』1986・11・15)

「家族規範」によって支えられた記事とは明らかに意味付けが異なっているこれらの記事では、性的対象としてのく女子高生>が登場している。それは、特定の誰かが性的なのではなく、く女子高生>であることがそのまま性的であるものとして描写されている。「家族規範」の視線から眺められた女子高生＝娘、ではなく、自分の娘ではない女子高生＝性的対象、という意味付けが、なされるようになってきたのが85年以降の動きである。

90年代のく女子高生>記事は、このような女子高

生=性的対象の成立によって支えられている。「社会的逸脱行為記事」として90年代を騒がせた「ブルセラ」および「援助交際」は、その記事内容から見る限り初期の段階では、90年代の「流行関連記事」と似た色合いのものである。それは、娘としての女子高生、ではなく、一様に記号化された<女子高生>として描かれている、と言えるのではないだろうか。流行関連記事的な色合いの濃い「社会的逸脱行為記事」が飽和状態になることによって、90年代後半の「流行関連記事」は用意されたと言える。というのも、「社会的逸脱行為記事」自体が、すでに新奇な現象を引き起こす主体としての<女子高生>を形作っており、そのような固定した<女子高生>像によって「流行関連記事」の内容、他者である<女子高生>はいまやこんな新奇なことまで行うようになっている、という伝え方の形式が作られているからだ。

以上のように見てくるのならば、i / iiの点も含め、80年代から90年代にかけての大きな流れにおいては、「家族規範」が喪失し、<女子高生>の表象のされ方、意味付けが「娘」から「他者」へと変容してきている、とまとめることが可能である。

E. 結論

<女子高生>という存在の描かれ方は、単にマスメディアの描き方だけに問題があるのではない。描かれ方には、それを支える人々の認識の枠組み—それをここでは「規範」と名づけている—が存在し、その認識との相関関係の中で、各々の記事の伝え方は決定されてくる。

本稿では、80年代から90年代の<女子高生>への意味付けを見た。週刊誌記事の分析によって得たのは、「家族規範」によって支えられ「娘」と意味付けられていた<女子高生>記事が、その喪失に伴い「他者」への意味付けへと変容した、という結論である。

もちろんこの変容はあくまで試論でしかない。今後さらに精密な分析を行うことで、精度を高くしていきたいと考えている。

(文責 花田 智弘)

1 選出された週刊誌および各雑誌の記事数については、II章表1参照のこと

2 ただし、<コギャル>は時期によって、性的な意味を付与されている場合とそうでない場合があり、記事内容などから適宜検討し判断した。

3 時期の設定理由については、II章の「B. 研究方法」を参照のこと。なお、87年までの記事は手作業による検索、それ以降はCD-ROMによる検索と、その検索方法が異なっているため、データに若干のズレが生じる可能性がある。

4 90年代には<女子高生>というタームが一般的であるが、80年代前半には同じ対象に<女高生>というタームが用いられていた。本稿では、対象が同じであることからこの二つはまとめた。

5 この記事に見られるように、本プロジェクトの記事検索では、「10代の性」などによる記事も該当するため、一部<女子高生>以外の記事も含まれる。

6 女子高生が最初に登場するのは、80年『週刊女性』。しかし、この記事は「ヌード写真集をカタログにした18歳」と特定の女性を指し示したものであり、85年以降のものとは異質である。